

今年もとうとう師走でございます。師走とは何か。師とは坊主のこと。年末は坊主が走る。だから、師走である。そういう語源を耳にしたことがあるが、どうして年末は坊主が走るのか。全日本坊主マラソン大会でもあるのか。そのあたりのことは今ひとつあきらかではないのである。もしかしたら……と私がかねがね思っている「師走」の語源があるのだが、ひそかに発表しよう。シーはスー。英語に堪能な皆さんは、もうわかりましたね。意味は、「彼女は田中好子だ」となる。どうして十二月のことを、「彼女は田中好子だ」と名付けたのか。そこまではわしは知らん。

大晦日のまえに、クリスマスがある。昨今では、イラク戦争を起こしているアメリカに対する嫌悪感から、クリスマスなどというアメリカ文化を日本で祝う必要はないっ、と豪語するひともおられるようだが、街なかでは、あいかわらずクリスマスツリーが飾られ、ケーキが売られ、偽サンタがうるついている。でも、クリスマスはべつにアメリカの行事というわけでもないし、キリストの生誕を祝う行事だし、サンタはもともとトルコ界隈の伝承なのだから、アメリカの専売特許というわけではない。

ただ、ライブ・エイドというプロジェクトで、「彼らは今がクリスマスだということを知っているのだろうか」みたいなタイトルの歌が歌われ、アフリカの飢餓を救ったことがあった。そのことはたいへんすばらしいことだと思うが、クリ

スマスというキリスト教信者にのみ通用する言葉をいかにも全世界のひとがクリスマススを待ち望んでいるかのように歌うのはたいへん傲慢なことではないかと思つた。人類すべてがキリスト教徒ではないのである。

クリスマスだ、師走だ、というと、クリスマス会や忘年会があちこちで行われる。お父さんもお酒を飲み過ぎて、鼻先を赤くして、夜のちまたをうろろろすることになる。誰も彼も、飲み過ぎて胃が荒れて、胃酸過多になり、げっぷをしたり、酸っぱい胃液を吐いたりして、みんなに笑われている。

真っ赤なお鼻の、おなか胃酸は、いつもみんなの笑いもの

という歌は、このことを歌つたものである。

さて、このへんで宣伝させていただきます。今月(二〇〇四年十二月)の十五日に、集英社から「笑酔亭梅寿謎解晰」という本が発売されます。小説すばるに隔月連載したものを集めたもので、久々の、ほんつとに久々のハードカバーです。

上方落語の世界を舞台にした連作で、私としてはひじょーに珍しい「ビルドゥングス・ロマン」であります。この「ビルドゥングス・ロマン」という言葉、私も知らなかったのだが、「蒼白の城XXXX(トリプル・エックス)」という本を書いたときに、「ライトノベルにあるまじきアンチ・ビルドゥングス・ロマン」と評されて、「なんやねん、このビルディングが何とかゆうのは……」と調べて、はじめてわかつたのである。

今回は、アンチではなく、そのものずばりビルドゥングス・ロマンであつて、そのあたりはかなり気恥ずかしいのである。全七話で、タイトルは「たちぎり線香」、「らくだ」、「時うどん」、「平林」、「住吉駕籠」、「子はかすがい」、「千両みかん」……とそれぞれ上方落語の題名がついており、各話に月亭八

天さんによる解説コラムがついている。表紙は、大阪を代表するイラストレーター、成瀬國晴さん、帯は、桂雀三郎師匠と恩田陸さん、という最高の布陣でお送りする。自分で言うのもなんだが、なかなかおもしろい本だと思うので、書店で見かけたら、ぜひ手にとっていただきたい。宣伝終わりっ。

というわけで、前回の続きである。

桂派と三友派のぶつかりあいが明治三十年代の上方落語の大隆盛を築いたわけだが、その後はしだいにじり貧になっていく。桂派においては、桂文枝が引退し、三友派では月亭文都が死去し、三代目笑福亭松鶴は講釈師になり、笑福亭福松もこの世を去った。明治四十四年には、桂派・三友派の合同による「桂三友両派合同興行」が行われ、いわゆる「手打ち」が行われた状態になったわけだが、これは「漫才」の台頭によって「落語」が衰退の道をたどるのでは、という両派の危機感をあらわしたものではなかったかと思われる。

そう。とうとう漫才が出現した。もちろんその仕掛け人は「吉本興業」である。新しい笑いとして、漫才はおおかたの客に大拍手をもって迎えられ、落語はじりじりと衰退の一途をたどっていった。

そんななかに現れたのが、桂春団治である。そう、「芸のためなら女房も泣かす」と歌われた、あの初代春団治である。実は、この春団治は二代目であって、初代は別にいるのだが、その人が「セコ」(下手くその意)だったために、いつしか二代目が「初代」ということになってしまったのである。こういう例はほかにも多くあるらしい。

この初代春団治は、落語が、というより、破天荒な人生を送った型破りのおもしろい人物として、小説や芝居、歌などの題材になり、そちらのほうで有名になってしまっているが、じつは、このひとの落語はかなりの量がSPレコードになっ

ていて、今でもCDでたやすく聴くことができる(映像も残っている)。聴いてみると、何とというか、濁ったようなダミ声で、それも、ぺらぺらぺらと速射砲のようにまくしたてる。これは、当時のSPレコードの収録時間がひじょうに短かったために、早くしゃべらないと一席が終わらない、という必要に迫られてのこととで、実際の高座とはちがうのだろう、とずっと思っていたが、どうもそういうことでもなさそうだった。つまり、ダミ声で機関銃のようにギャグをまくしたてる、というのがこの桂春団治の芸風なのだ。しかも、使っている言葉は、容赦のない純粹な大阪弁。大阪生まれ大阪育ちの私にすら、わからない部分があるような、古いタイプの大阪弁である。だから、はじめてこのひとのレコードを聴いたときは驚いた。しゃりしゃりというスクラッチノイズの向こうから、低いガラガラ声かものすごい速さでしゃべりまくる。言葉尻とつぎの言葉の頭がかぶさるぐらいの速さなので、何を言っているのか、必死で聴かないと聴き取れない。これのどこが名人やねん、爆笑王やねん、とそう思った。しかし、最近ようやくこの「しゃりしゃり・ダミ声・速射砲」の良さがわかるようになった。春団治は、従来の上方落語の型を破って、新しい落語を創りあげたとよくいわれるが、具体的にはどういうことなのか。たとえば、ナンセンスで破天荒なギャグを猛スピードでまくしたてる、カラカッチ・カラカッチ、とか、バラバラガサガサ、バラバラガサガサといった擬音をふんだんに盛り込む、小便や屁のような下ネタを上手に使う、大胆なネタの省略を行って、おもしろい部分だけをつなく……などなどの理由が挙げられることが多いが、それらのどれかひとつではなくて、ひとつのまとまりとなって春団治落語を作り上げているのだと思う。春団治の落語の「新しさ」を一言で言うと、やはり「スピード感」だろう。おもしろさのため

には、なんもかんもすつとばして、ガンガンいく。それなのに、ちゃんと「間」が感じられる。そのあたりの呼吸が、稽古してできたものというより、生来のもので、天才といわれるゆえんだろう。有名な「へつつい盗人」の速記（先頃出た「初代桂春団治落語集」という東使英夫氏による労作）を引用させていただこう。夜中、へつついを盗もつとする二人連れが、道具屋の店先で、音を立てるなよ静かにしろよといいながら忍んでいく場面である。

「いえ、道具屋の表に竹の垣が立て掛けたあんねんさかい、それをソノ音のせんようにそーとこつちい退けちゅうねん」

「ふん」

「音さすなよ」

「ふん」

「さ、早よ取り」

「ふん」

ガラガツチガツ

「おいおい、おいおい。大っきい音さしな・音がするが。」

そーと行きいな」

「ふん」

ガラガラ ガラガラガツチガツチ ガラガラガツチガツチ

ドンガラガッター プッパー

「おい、なんしてん、なんしてんこれ」

「えらいことしたー、えらいことした」

「ドーンて何落としてん」

「石灯笼の頭落としてん」

（中略）

「アホやなこいつは。暗がりやさかい氣い付けちゅうてんねやな。プッパーちゅうのはどいしてん、プッパーちゅうのは」

「ふんあの、表に三輪車の車置いたってね、デふらふらーとふらつく拍子にそのラッパへ手え支えてん」

「アホやなーこいつは。余計大けい音さしやがんねん、どアホがラッパの音なら、いっぺんでええねが、手え支えたら。」

「二度お鳴ったがな？」

「あんまりええ音やさかい、また押さえてみた」

こうやって文章で書くときつこう長いが、すごい速さでまくしたてるので、ほんの一瞬である。ほんの一瞬のあいだにこれだけのギャグが入っているのだ。もちろん、今でも十分通用するギャグばかりで、現に、今、高座にかけられている「へつつい盗人」でもこれらのギャグが使われる場合が多い。

桂米朝師匠の「落語と私」に、正岡容の「随筆寄席風俗」という本からの引用が掲載されているが、それを紹介させていただく(原文は旧仮名だが、現代仮名遣いに改めさせていただいた。あちこちで引用されている、有名な文章である)。

……人間がくすぐられて笑うところを、第一に脇の下であるとする、第二に足の裏であるとする、第三におへその周りであるとする。それを春団治こそは、寝食を忘れ、粉骨碎身し、粒々辛苦の結果、たとえば額とか、膝ツ小僧とか、肩のどの線とか、親指と人さし指の間とか、全く思いもおよばざるところに哄笑爆笑の爆発点を発見し、遮二無二、その一点を掘り下げていった大天才であったと思う。所詮は、あくどい笑いに対してよく云われる「くすぐり」というような卑小な世界のものではなかった。ここに笑いの大木あって、さんさんとそれへ笑いの日がふりそそぎ、枝からも、葉からも、蕾からも、花からも、実からも、幹からも、根元からも、笑いの交響楽が流れ、迸り、交錯し合って、さらにドーツと笑

い合うすさまじさであったといえよう。私は、生まれてから（おそらく死ぬまで）この人以上に笑わせられた歴史を持つまい。

おそらくこの文章以上に、初代春団治の魅力を適格に言い当てたものはあるまい。生の高座に接したことのない我々すら、その警咳の一端に触れたような気にさせてくれる。だが、この文章を読んで、私が思い出すのは、故桂枝雀のことである。私は、高校から大学の時分、枝雀のレコードや生の高座に接し、この文章とほとんど同じような思いをした。ほかの噺家がやっても、全然おもしろくないような箇所までが、枝雀の手（舌？）にかかるとめちやめちやおもしろいギャグに変身する。しかも、それがひとつふたつではなく、こちらはすでに笑っているのに、それを上回る爆笑が、まだ笑い終えないうちに襲いかかってくるので、もう息も絶えだえ、腹の皮がよじれるような状態になる。落語を聴いて、笑いすぎて苦しい、という経験をしたのは、私にとって枝雀の高座以外ではないのである。この正岡容の文章を読むかぎりでは、おそらく当時の客は、私が枝雀の落語で経験したのと同じような目にあつたのではないだろうか。でないと「爆笑王」とはとうてい呼べないだろう。

春団治の経歴を簡単に述べておこう。明治十一年に生まれ、十八歳で桂文我の弟子になり、我当という名前をもらう。桂文我は、浪花三友派に所属していた。前回にも書いたが、桂派は、落語家だけで固め、あくまできつちりした噺をするのが身上だったが、三友派は、陽気ににぎやかに派手に明るく……という、色物的要素を含んだ芸風だった。春団治は、陽気で派手な三友派から出発したのである。

明治三十三年、二つ目になったが、生活態度はむちゃくちゃ

で、博打を打っている最中に警察に踏み込まれ、屋根づたいに逃げる途中で転落して、大怪我をしたりした。しかし、修行はおこたらなかつた。明治三十五年に、師匠の文我は、我当を、桂文団治に預ける。興津要の「落語・笑いの年輪」という本によると、無茶者（同書によると「臆病なくせに鼻っ柱がつよく、お調子者でむちゃくちゃな」とある）の我当をもてあました、というだけでなく、彼の素質を見抜いて、さらに本格的な修行をさせてやろうという気持ちがあつたようである。翌年、桂春団治を襲名した。二代目であつたが、のちに初代と称するようになり、今ではすっかり初代として定着してしまつた。

明治四十四年に結婚した。このころ、出囃子が鳴っているのに舞台上に登場せず、客が、どうなっているのかと騒ぐなか、客席のいちばん後ろから登場し、客のあいだをぬうようにして高座にあがつた、というエピソードがある。派手好きな春団治らしい演出だが、客は大喜びだつたらしい。また、翌年の正月、紋が破れて、そのしたからネズミの絵がのぞいているといふ羽織を着て高座にあがり、古着屋で買った羽織の紋をネズミが噛み破つてしまつたので、しかたなしにネズミの絵を描きましたと説明した。子年の正月でもあり、この演出は大受けした。有名なエピソードである。このように、型破りな演出で人気を博していた春団治だったが、身分はいまだ二つ目のままであり、私生活もわやくちゃで、膨大な借金を作り、博打ですってんてんになつたり、三友派を脱退したりと、尻のさだまらぬ暮らしが続いていた。

大正三年にようやく真打ちとなるが、師匠の怒りにふれて、喜楽家独身と改名した。なんとも……な芸名である。のちに許されて春団治に戻るが、芸者と駆け落ちしたりして、やることなすことがだらめである。そして、春団治の名前を決

定的にしたのが、「後家殺し」のエピソードである。大正五年、道修町の大きな薬種屋の未亡人と深い関係になり、前妻と協議離婚して、未亡人と正式に結婚した。財産分与問題で裁判沙汰になったが、そのことを新聞が「後家殺し・春団治」と派手に書き立て、これまた格好の宣伝となった。裁判の結果、もらった財産は、信じられないぐらいの莫大な額であったが、これを春団治は二年ほどで浪費してしまい、もとのすってんでんに戻るどころか、多額の借金を背負うことになる。後先考えない、すごいおっさんである。差し押さえの紙を、自分の舌に貼って撮った写真が新聞に載ったのもそのころのことである。

大正十五年には、なんと「ものいうレコード煎餅」というのを発売した。これは、要するに「食べられるレコード」のだが、湿気るととてもレコードとしては使用できず、またまた大失敗をした。このあたりの行動は、もう「アホ」としか言いようがないが、逆に言うと、映画や芝居の題材にはまさにうってつけの人物なのである。

時代は昭和に入り、昭和五年。当時、所属していた吉本興業は、所属芸人がラジオに出演することをかたく禁止していた。なぜなら、落語や漫才がラジオで聴けるようになる、寄席に来る人数が減るからである。吉本は、春団治がラジオに出るのでは、と疑い、大阪の放送局を見張っていたが、裏をかいた春団治は、京都の放送局から「祝い酒」を放送。怒った吉本興業は春団治を訴え、春団治は差し押さえをくった。しかし、ラジオで春団治の落語を聴いた視聴者は、「ラジオでもこんなにおもしろいやつたら、本物はどんなにおもしろいやろ」と寄席へ押しかけたという。ラジオの宣伝効果が身に染みた吉本興業は、芸人のラジオ出演を解禁した。

と、まあ、掛け足で初代春団治の足跡をたどって見たが、

やはり一番いいのは、彼を扱った小説や映画、芝居などに触れることだろう。ただ、そういうものにとりあげられているエピソードの多くは、のちの作り事であったり、春団治自身が宣伝のために流布していた嘘であったりするらしい。そういうあたりも、初代春団治の存在自体が「伝説」になっていることを示している。笑福亭仁鶴、桂枝雀など、初代のレコードを愛聴してプロになった噺家は数多く、いまだに上方落語に多大な影響を及ぼし続けている、といえぬこともない。

昭和九年、胃ガンでこの世を去った初代春団治だが、彼の死をまるで待っていたかのように、上方落語は衰退の坂を転がり落ちていく。漫才という新時代の笑芸の台頭と、力量ある噺家の相次ぐ死去によるものだが、それに戦争が拍車をかける。次回は、滅びゆく上方落語に何とか歯止めをかけようという努力と、戦後の復興、そして、現代の上方落語界の隆盛について語ってみたい。

えー、最後になりましたが、「笑酔亭梅寿謎解噺」（集英社）、よろしく願いします。

（了）